

『有機農業論者』に問う

全農・肥料農薬部
肥料技術普及課長

岡 本 信 行

1 実体のない言葉がひとり歩き

有機農法信奉者の共通点は、有機物の施用による地力の培養を最も重視し、農薬と化学肥料を使わない自然農法への転換を指向していることであろう。こうした農法の実践を通じ、生産者と消費者が、商品経済的論理を越えたところで提携（人間としてのふれあい）する「有機農業運動」が一定の広がりをみせはじめ、農協の組織活動のなかにも顔をみせるようになった。

しかし、有機農業といわれているものの実態はさまざまであり、その考え方に多くのニュアンスの差がみられる。最近では、“有機米”とか、“有機トマト”といえは高く売れるので、安全な食品や自然食を求める風潮を利用する生産者も出てきた。

一方、有機農業論者は、自ら信奉する農法を広めるためには手段を選ばず、化学肥料や農薬を毒物扱いし、土を荒らし、農薬禍を生み、複合汚染の危険をはらんでいると警鐘を鳴らす。“有機農産物”以外の農産物は危くて食べられない、といわんばかりである。

2 善玉、悪玉の構図からは何も生まれない

私は、有機農法（自然農法）にではなく、有機農業論者に注文がある。有機農法実践者の篤農技術は学ぶべきであるが、技術的根拠にとぼしいわずかな状況証拠をふりまわして、いたずらに危機感をあおる、研究者を装った無責任な発言には我慢できない。

故吉佐和子さんの力作「小説複合汚染」が書かれた頃から、すでに10年を経たというのに、人々の底の浅い正義感を当てにした有機農法という善玉が、化学農法という悪玉をこらしめる構図から、少しも出ていない。なぜか、わが国農業の本質に迫り、個別技術の意味に深く立ち入ったうえで、それでもなお技術の進歩や事態の改善に疑念があるなら、具体的にどうすべきかを述べる、といった姿勢に欠けている。

対立する見解のもち主なのだから公然と論争すべきである。同じ土俵にあがらなければ組みあうこともかなうまい。誤解を解くためにもお互い相手をよく知るべきで、当方にすれば、たとえばわが国の土壌肥科学者が書いた地力論を先ず読んでもらいたい。何が真実であるか学ぶべきところが少くないはずだ。（文末に論文名を

掲げておいた）

3 有機物は微生物学的な機能で区分したい

土壌に対する有機物施用は、土壌の物理性、化学性を改良する効果も大きい、土壌中の微生物に栄養を与えることがとくに重要視されるべきである。だが、良質の有機質肥料が確保しにくい段階において、内容は問わずただ有機物を施用すればよいというわけにはいかない。有機質肥料という言葉が肥料取締法の規格より広義に解釈し、植物油かす、魚粉、骨粉などからパーク堆肥、牛糞堆肥、下水汚泥コンポストなどまでの、易分解性有機物から、粗大有機物までを含めて用いているのが普通である。

私は、これら有機物資材は、内容によって上手に使いわけの必要があり、用途に応じて区分すべきであると考えている。広義の有機質肥料ではあまりに不都合であるから、当面は、大まかに易分解性有機物と粗大有機物にわけ、細かくは内容がよくわかるよう、できるだけ種類名をあげて説明した方がよいと思う。

その理由は次による。一般にC/N比が10以下、N含有率が2%以上で、いわゆる易分解性有機物を主体とした有機質肥料は、土壌微生物相に与える影響が大きく、一般にB/F値の上昇をもたらし、土壌病害虫の主体をなすかび類、線虫類の増殖を抑制する作用など、生物環境を改善する面がある。また、易分解性有機物に富んでいることは、わら類、パークなど分解しにくい粗大有機物と併用する場合、腐熟を促進し、さらに微生物分解産物による土壌粒子の団粒形成、土壌の緩衝能の増大等が物理性の向上に貢献していることは事実である。

有機物資材の特性や利用に関しては、膨大な研究成果があるわりには、体系的なまとめができていない。そのなかでも、とくに普通肥料としての有機質肥料は、化学肥料と堆肥の間にはさまれて、施用の意義を総合的に実証したものは少ない。米沢（全農）の学位論文「有機質肥料の施用効果に関する研究」をしのぐ研究成果は、当分出ないといつてよい。ちなみに、全農では毎年1千万円を投じて、有機質肥料の特性解明と、未利用資源の開発にとりこんでいる。

ともあれ、いまは研究があまり進んでいないので、無

理としても、有機物資材—微生物フローラ—物質代謝—作物生育の関係が明らかになったならば、各種有機物資材を微生物学的な機能によって区分するのがよいと思う。微生物学の今後の発展を願ってやまない。

福島県の篤農家（有機農業実践農家）は、“ぼかし堆肥”と称して、大量の粗大有機物（稲わら、もみがらなど）に易分解性有機物（米ぬか、大豆油かす、魚かす、骨粉をそれぞれ60kg）を300kg/10aをふりまぜ、発酵中のものを施用している。深耕するうえ、これだけの良質堆肥を毎年入れるので、野菜を連作しても病害は出ないという。発酵中の植物油かすの静菌作用によって、土壌病害を抑えた実験結果もあるので、この“ぼかし堆肥”の効用には注目していきたい。

4 有機農業となぜ呼びたがるのか

ここに紹介するのは、現在2ヘクタールの畑に年間100品目もの作物をつくっている、42才の農家の述懐である。少し長いが引用する。

「約7年間有機野菜の産直を続けたものの、常識を逸脱する農業理論を押しつけてくる消費者に耐えられず、慰謝料も養育費もけっこうですので、とにかくやめさせてくださいと、第1線から身を引いた。手かせ足かせが取れ、自由な発言ができる立場になったので、私の有機農業論を述べてみたい。

私は有機農業には3つの形があると考えている。(1)神がかって有機農業、(2)熱心な農民なら、実現可能な有機農業、(3)有機農業=有利農業、つまり有機を利用した儲かる農業。私が追った有機農業は(2)であり、その内容は、オーソドックスに土を肥沃にする、土に力をつける、土にミミズを住まわせる、旬の野菜を作る、輪作を考える、作物の混作を工夫してみる、など理論的、経済的、労力的に可能なことを、あらゆる形でためてみることであった。

大学生のグループの援農はもちろん、週2、3回消費

者の人たちが畑にやってきてくれた。その人たちに私は栽培の全容を公開し、なぜ無農薬で野菜が育つのか、逆になぜ農薬の力を借りなければならないのかを、よく説明した。虫喰いでも、あばたでも、形がいびつでも、多少値が高くて、量が多くても、少くともよい、という条件の産直であれば、多くの野菜の無農薬栽培は可能である。

一般的にみて80%ぐらいのものは、農薬なしで育てられる。しかし残り20%（天候の悪変10%、技術面の未熟さ10%）は無農薬では不可能とみるべきで、そのゆとりを見てもらえるのが、実現可能な有機農業ではないかと私は考えている。

また農薬禍の問題は、最も危険にさらされている農民サイドで主に考えられなくてはならないことで、消費者が自分たちのために安全なものを造れ、よこせというのは、消費者のエゴではないかと思う」。

ことさらに有機農業を標ぼうしなくとも、篤農家はやるべきことはやっているのだ。

1. 土壌管理からみた畑作農業の研究課題

- ① 最近の畑土壌の変化の様相と問題点
- ② 今後の研究課題

「農業技術」第38巻第11号、第12号（1983）
西尾道徳（農水省農業研究センター）

2. 地力雑感 日本土壌肥科学会大会記念論文（1968）

地力外論(1), (2) 「農業技術」第33巻第3号、第4号（1978）
石塚喜明（北大名誉教授）

3. 地力を考える 「肥料科学」第6号（1983） 弘法健三（東大名誉教授）

4. 土壌肥科学からみた現在の地力問題 「農業と経済」10月号（1984） 熊沢喜久雄（東大教授）

あとがき 昭和44年7月、チッソ(株)肥料部と、旭化成工業(株)肥料部が合併して、現在のチッソ旭肥料(株)が創立されて、ちょうど15周年。これを記念して本誌は、10月号を『創立15周年記念特集号』として発刊致しました。

各先生方からそれぞれ興味ある論稿や随筆などが寄せられ、誠に有難うございました。中でも、編集子の注目を引いたのは、徳永美治先生から寄せられた『土壌肥料研究の筑波での新しい展開方向』でした。

新しい農業の時代に対応するためには、新しい農業技術研究が先衝しなければなりません。その意味で、農水省の農業研究センターを中核とする新しい農業研究機関の新設は、我が国農業技術研究におけるモニュメントと云って良いと思います。と同時に、これだけの機構を、よくぞ比較的短時日のうちに誕生させたものだとして編集子は、関係の皆様方の情熱の強さに多大の敬意を表します。

話は昔のことになります。実は、昭和44年7月チッソ旭肥料(株)が新発行しましたとき、編集子は新会社から、引続いて雑誌の編集を担当するよう要請を受けまして、以来15年間にわたり『農業と科学』の編集を担当して参りました。

ハッキリ申し上げますと、チッソ時代『硫 磷 安 時

報』の題号で毎月発行しておりましたので、ご記憶の方もおられると思います。

実は編集子は、『硫磷安時報』発行の翌年昭和32年10月以降、『硫磷安時報』の編集を担当致しておりましたので、両方合計致しますと、通算27年の長きに亘ります。

本誌と編集子との関係は、以上申し上げましたような成行であります。あまり長くなると何とやら申しますが…、編集子はこの際、編集担当をご辞退申し上げますことに致しました。

会社で当局も快よくご承知頂きましたので、昭和59年10月31日限りで、雑誌編集業務をご辞退することになりました。

ところが編集子は、これまで編集上のことで誌上に本名を載せたことがありませんでしたので、妙な成行になりましたが、この機会に本名を申し上げます。

私は河見泰成というのが本当の姓名です。もう少し内容を付け加えますと、昭和26年4月から(肥料の配給統制が撤廃の年)36年10月まで10年間、『季刊肥料』を発行致しましたが、経営の才に恵まれない男のため、経営10年にして遂に幕をとじた男だと申し上げればご記憶の方もあろうかと存じます。本当に長いこと有難う存じました。(河見泰成)

チッソ旭の新肥料紹介

★作物の要求に合わせて肥料成分の溶け方を調節できる画期的コーティング肥料……………

ロング <被覆磷硝安加里> **LPコート** <被覆尿素>

★緩効性肥料…………… **CDU**

★バーミキュライト園芸床土用資材…………… **与作V1号**

★硝酸系肥料のNo.1…………… **磷硝安加里**

★世界の緑に貢献する樹木専用打込み肥料…………… **グリーンパール**

 **チッソ旭肥料株式会社**